『そんな心細い事云ひないナ。花見に往き度けりや往かんかい。木戸錢も何も要らへんがな。』
『食ふ物も飲む物も無しで往たかて、面白い事あれへん。』
『お前等は其んな事云ふさかい不可ん。家に居たかて飯食ふやろがな。それを向ふへ持て往て喰たら良えねがな。』
『それに仕たかて肝腎の酒が無いやないか。』
『さア。酒が無けりや往けん様に思ふてるさかいに、大層に成るのや。徳利に茶を詰めて往きんかいナ。人間は氣で氣を養ふのや、人が酒盛で、此方は茶か盛や。』
『そんな阿呆らしい事得ふ思わん。』
『そこが夫れ、氣で氣を養ふのやがナ。』
『そないなヂヤラ〳〵した……。それに第一着物が有れへん。』
『何で着物が無いと往けんのや。お前等ほんまの贅澤ちウ事知らんな。某る金満家の旦那が洒落れた花見を仕様と云ふので、藝者幇間を先きへ遣といて、自身は穢い襤褸々々の着物を着て往きなはつた先きの連中が陣取てる所へ、醤油で煮〳〵めた様な手拭で頬被りして、どふぞお餘りを戴かして遣とくなはれ云ふて往きやはつたんや。幇間が出て來て、こら彼方へ往けアタ汚い云ふて、ドンと突きよつた。すると旦那がこれ蝶助、そんな無茶すな云ふなり、頬被りを除て、襤褸をグルツと脱ぎなはると下は別染の長襦袢に縮緬の扱帯と云ふ風でスツと立ちなはつたんや。一座の者は云ふも更なり、周圍に見てる者がアツと吃驚してる顔を見て樂しむと云ふ。何ふや、これ等がまア此上なしの贅澤な花見や無いか。左様やろがナ。そや依てに着物は却て穢い方が面白いのや。』
『そら面白いやろ。其旦那は面白かつたやろ。襤褸を脱いだら下に別染の襦袢があるのや。それから藝者相手に散財しやはんね。面白いに違ひ無いがナ。そやけど此方等は左様往かんがな。此着物脱いだかて下から別染が出るのや無し。背中の灸出して茶ばつかりガブ〳〵飲で夫れが何面白いのや。』
『さ其處をや。下には立派な長襦袢を着てると思ふてたら宜えやないか。なア。氣で氣を養ふね。』
『彼様ばつかりや。』
『オイ、皆此處へ集つといで。』
『何や〳〵。』
『先刻から今日は一つ花見を仕様や無いか云ふ相談が出來たアるね。お前等も往けへんか。』
『オツト、山椒。』
『奇しい事云ふない。山椒て何やい。』
『知らんのかいナ。旦那方の遣やはる言葉や。』
『夫れなら賛成やろ……お前は。』